

アジアの中のオーストラリア

(上)

中 嶋 嶺 雄

従来の世界地図的
認識をくつがえす

従来の世界地図的認識の陥穽で国際情勢の大きな変化がう
か(かんせい)にも気づかざるを得
た自己認識の形成をまきなくさ
せたといえるのである。

「オーストラリアはアジアであ
る」といふなら、多くの日本人は
やはり戸惑つてゐる。最近の厳
しい国際情勢のなかで、「アジア
・太平洋地域」とか「環太平洋共
同体」といった提唱から、わが国
の国際環境を見直さつてという傾向
が次第に強まりつつあるとはい

しまつ。だから、私たちの世界地
図的認識からすれば、オーストラ
リアがアジアである(はず)はな
い。それに、白豪主義はすでに過
去のものになったとはいへ、オ
ーストラリアはなんといつてもれ
きとした白人社会・イングリッ
クソンの国ではないか……。

だが、今日のオーストラリア
は、右のように日本人の固定観念
をくつがえす方向へ大きく「離
陸」しはじめてゐる。オーストラ
リアは、いまやアジア・太平洋國
家としての立場を明白に主張して
いるばかりか、さらにアジアの一
員としての自己認識を形成しはじ
めているといつてもよいように思
う。ここに二つの見本を示してみ
よう。それは、昨年七月に創刊さ
れたオーストラリア・アジア研究
学会(ASAA)の機関誌「レヴ
ュー」の表紙にイラストされてい
る地図であるが、描きよつによつ
てはアジアをこの地図のよつに書
くことも十分に可能なであり、
この地図をながめてみると、オ
ーストラリアのアジア観がいかに
よつわかるよつな気がする。私た



え、オーストラリアやニュージ
ランドは、やはり大洋州であつて
アジアではない、と多くの日本人
は思つてゐる。

私たちが世界を考える場合、地
図は不可欠の素材であるが、それ
は、しばしば私たちの世界認識に
截断した固定観念を植えてつて

Review



オーストラリア・アジア研究学
会の機関誌「レヴュー」の表紙

同一化促す国際情勢

特に日本との関係重視へ

もっとも、オーストラリアがア
ジアの一員としての自己認識を形
成しはじめたのは、ごく近年のこ
とであり、そこには、きわめて今
日的な歴史的背景があつたといわ
ねばならない。つまり、一九六〇
年代後半から七〇年代前半にかけ

においても、その経緯において
も、世界史に特筆さるべき過去を
もち得なかつたこの國は、今世紀
初頭にオーストラリア連邦を形成
し、三〇年代初めに事実上の独立
國になつてからも、周知のよつに
英連邦の一員として存在してきた
のだが、その母国イギリスはスエ
ズ以東からの撤退、そしてECへ
の加盟によつて、もはや遠い彼方



文化

英米撤退でゆらぐ
伝統的「保守主義」
アメリカと同じくほぼ二百年の
歴史をもつとはいへ、建國の理念

赤堀 尚・圖

アジアの中のオーストラリア

東京新聞 一九七八年五月十六日
夕刊

国際色豊かな太平洋
地域研究大学院

オーストラリアに来てみて驚いたことの一つは、アジアの一員としての自己認識に目覚めつつあるからであるが、アジアに属する地域研究が予備以上に盛んであり、まさに発展途上にあることである。

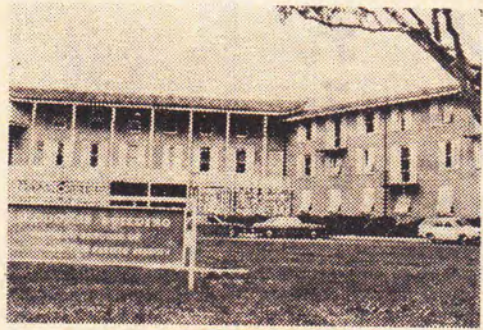
究のセンターになってきたといつてよい。この研究大学院(院長は中国史のワン・ガン・ウー教授)は、人類学、言語学、生物地理、

中嶋 嶺 雄



『東京新聞』(夕刊) 1978年5月16日

現代中国研究に意欲 底に人種的偏見の「贖罪」意識



オーストラリア国立大学アジア
・太平洋地域研究大学院の全景

どの部門にも海外からの客員スタッフが常時参加する体制になっていて、国際色が大層豊かである。ちなみに、私が所属する現代中国センター(ヘッドは労働党のホイトラム政権時代に三十代半ばに設立された)は、一九七〇年に設立され、七五年に正式にこの研究大学院の一機関になったのであるが、二つた事実、中国への関心の高まりもその一因である。研究のなかでは、やはり現代中国の研究が中心で、重要な役割を担っている。認識の反映でもあった。

付属図書館などの 資料や図書も充実

で初代中国大使に抜擢されたS・フィッツジェラルド氏は、学内各部門の研究者が集まる活動的な研究集団であるが、この一年間には、私以外にもハーバード大学(米)のロス・テレル教授、ペンシルベニア州立大学(米)のパリス・チャン教授が客員教授として招かれたほか、イスラエルのヘブライ大学からエディス・ジョフィ教授がセンター専任スタッフに就任している。

俳優座劇場草

—東野 英



一九五四年に俳優座劇場が開場してから二十年余になる。この劇場もその繁栄を終えて新しく生まれ変わるつとにしている。終戦直後は焼け払い古する場所がなくて本郷赤門前の富福寺の住職今井大彰氏の好意で本堂を拝借したり、吉祥寺の信用組合の事務所を借りたりした。その後六本木に小さな稽古場を建て、それから演劇研究所設立、劇団十周年を期して劇場を創ることを千田さんの発案で計画し、その通りにてかく実現出来た。私はコンクリート打ちにはほとんど連日のように見に行き、その時にも、こんな小さな劇場を建てて採算がとれるはずがないという批判とも悪口もどれるような言葉を浴びせられた。大谷竹次郎さんが女性秘書を伴って見に来られた。舞台から客席までをぶきに見られた後でなかなか大変な、よく出来たね、しっかりおやんなさいと激励してくれた。氏は劇場の外からしばらくながめて帰って行った。このように大先輩がこんな小さな劇場にも関心をもち、決めたことにたいするある種の「贖罪」(しよくざい)の意識が底流しているように思われることについては、わが国の場合と比較しても興味深い。

日・中・豪の三角型連携を重視する

だが同時に、「贖罪」の意識は、その反作用としてしばしば対象へのエモーション(感情)と理想化を伴うものである。中国の今日の現状への希望の観測がかなり強いようにも思われる。こうした見方からすれば、日・中・豪の三角型連携こそ、アジアの将来にとって重要な結論になるように思われる。日中関係は問題なく順調に発展するであろうと見ている人びとが多い。

日中関係は、いわば異母兄弟の間に、長い間の人種的偏見のため中国人移民を待遇

る日、大谷竹次郎さんが女性秘書を伴って見に来られた。舞台から客席までをぶきに見られた後でなかなか大変な、よく出来たね、しっかりおやんなさいと激励してくれた。氏は劇場の外からしばらくながめて帰って行った。このように大先輩がこんな小さな劇場にも関心をもち、決めたことにたいするある種の「贖罪」(しよくざい)の意識が底流しているように思われることについては、わが国の場合と比較しても興味深い。

日・中・豪の三角型連携を重視する

だが同時に、「贖罪」の意識は、その反作用としてしばしば対象へのエモーション(感情)と理想化を伴うものである。中国の今日の現状への希望の観測がかなり強いようにも思われる。こうした見方からすれば、日・中・豪の三角型連携こそ、アジアの将来にとって重要な結論になるように思われる。日中関係は問題なく順調に発展するであろうと見ている人びとが多い。

日中関係は、いわば異母兄弟の間に、長い間の人種的偏見のため中国人移民を待遇

現代工芸美術協会が分裂

十七年前、伝統工芸に反対して現代の美術工芸を目指して創設された現代工芸美術協会(代表・山崎寛太郎氏、会員三百十六人)が、このほど二百人の退会声明によって分裂した。退会声明者は、

へ旋回していつてしまった。加えて、ニコソン・ドクトリン、アメリカのアジアからの撤退といったアジアの相次ぐ変動は、英・米資本主義の再生産圏に甘んじて豊富な農牧資源と稀少人口のゆえに高い生活水準を維持してきたこの国の伝統的『保守主義』を大きく揺るがしたのである。

こうした事情が、民族的・社会的にはヨーロッパ国家のこの国をいまさらながら地理的に目覚めさせ、いきおいアジアへの同一化を促したといつてよいであらう。

ASEAN諸国は 対象となりえない

このようなオーストラリアにとって、本来、もっとも身近なアジアとは、メラネシア、ミクロネシア、ポリネシアといった南太平洋群島群であり、さらにインドネシアをはじめとするASEAN諸国であるはずであるが、しかし、民族形成と経済開発の途上にあるこれらの諸国はオーストラリアが依拠すべき対象ではない。この国が

有数の資源輸出国であるといつてもいまだ第三世界のいわゆる資源ナショナリズムの立場にくみするわけにはゆかない。そして、オーストラリアがアメリカの側に立つてウエトナム戦争にコミットしてきた経緯からしても、インドシナ三国との関係はすでに強化できずにない。

この国とは対照的にソ連が今日、アジアの一員といふ顔付きをしているとしても、ソ連の影はあまに薄く、結局、この国にとってアジアとは、中国であり、

日本なのである。

その中国とは、一九七二年に国交を正常化して以来、大いに友好関係を深めつつあり、それだけに毛沢東以後の中国現代化の方向にも関心が集まっている。一方、中国の側もカナダと並んでオーストラリアから小麦を買っているが、いまだ対中貿易は全体でこの国の輸出のわずか一・六％、輸入の一・〇％にすぎず、輸出の三四・〇％も占めてる第一、量の日本の比ではなく、この点からすれば、この国にとって中国はまだ未だ彼岸の存在である。

国民の間には日本 への潜在的警戒心

「このように見るとき、この国がいかに日本との関係を重視しているかは明瞭であり、それだけ私たちの対オーストラリア認識を深め、日豪関係を強化すべきであらう」とは、つまりでもない。しかし一方、この国の日本へのそのような「想い」は、本質的には懸念関係としてのものであって、この国の国民の間にはいまだに日本への潜在的な警戒心が存在するばかりか、アジアの一員として存立してやうという国家目標にもかかわらず、オーストラリアの国歌は断然「ゴッド・セイヴ・ザ・クイーン」だと固く信じている人びとが多いことも事実である。

美しく広大な自然が涵養な大氣になじんできたこの国の人びとが、アジアのドロドロした現実になじんで手を汚すことができないのか、今日でもシダニー国際港の検疫は世界に例を見ないほど厳格である。

(東京外国語大学教授・国際関係論・オーストラリア国立大学現代中国センター客員教授としてキャンベラ滞任)